

埼玉県立博物館におけるシーケンス構成 — 経路選択からみた領域構成と眺めの分析 —

真木利江 (感性デザイン工学専攻)

乙村雅人 (感性デザイン工学専攻)

Analysis of sequence of lobby space

In Saitama prefectural museum.

A study on path choice of area composition and scene.

Rie MAKI (Lecturer, Graduate School of Sciences and Engineering)

Masato Otomura (Graduate Student, Graduate School of Sciences and Engineering)

Kunio Maekawa (1905—1986) played an important part in the creation of modern architecture in Japan. The purpose of this study is to clarify the sequence of lobby space.

This study focuses on the Saitama prefectural museum, and analyzes the following two points: directionality of action and scene. In consequence, there was a clear contrast in the relation of the type of the act and the scene.

Key Words: Kunio Maekawa, Saitama prefectural museum, Lobby space, Sequence, Spatial composition,

1. はじめに

本稿は前川國男の後期作品群における代表作の1つである埼玉県立博物館のロビー空間を対象とし、シーケンス構成の特徴を明らかにすることを目的としている。

前川國男の建築作品は身近な素材と単純な構法を用い明快な空間をつくりあげながらも、人のよりどころとなる確かな存在感を内包する作品として高く評価されている。前川による建築作品に関しては多くの言説が存在しているが、建築意匠学的な観点からの研究はほとんど存在していない¹⁾。

すでにわれわれは、前川國男における9つの美術館・博物館によるロビー空間を対象とし、その空間構成の特徴を明らかにしてきた。そこで本稿は埼玉県立博物館のロビー空間におけるシーケンス構成の特徴を経路選択からみた領域構成と眺めの分析を通して明らかにする。

2. 分析の対象と方法

分析対象: 埼玉県立博物館のロビー空間を中心としたシーケンスを対象とする。ロビー

空間は大きく吹抜けホール・エントランスロビー・食堂で構成され、平面形状は全体をほぼ南北方向の長辺 72,000mm、短辺 18,000mm の直線状の平面構成をとり、水平な天井面が全体を覆う一体的な空間をなっている。またロビー空間は平面形状より長辺方向への空間の方向性を持っているといえる。

断面的にみると、南側端部に位置する食堂はエントランスロビーよりも床レベルが 1,650mm 高く設けられ、北側端部に位置する

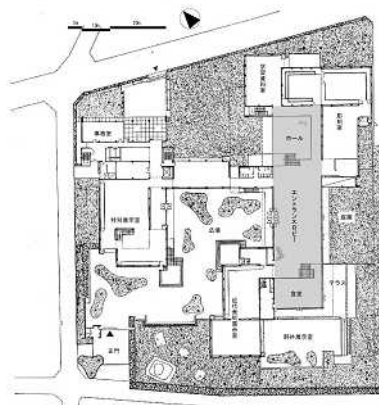


図1 ロビー空間の配置

吹抜ホール部分は床レベルが4,800mm低く設けられ、かつ上部が吹抜となっている。

分析方法：対象とするロビー空間は、博物館全体で見ると展示間の移動や休憩、滞留の場と位置づけられる。この空間には建物全体のアプローチのほか、各種展示空間が接続している。またこの博物館は「一筆書き」ⁱⁱの構成が結実した作品として評価されているが、これは全ての来館者に同じ経路を強制するものではなく、来館者が経路を選択しそれらを緩やかに結ぶ構成を指している。

経路の選択性という観点からロビー空間を複数の領域へと区分し、来館者が自ら構成する経路構成の可能性を領域の組み合わせの可能性として整理する。次に各領域を対象として、領域の形状と他の領域との接続の様相から行動的方向性を、同時に他の領域や外部に対する視覚的連続性から視覚的方向性を明らかにする。これにより、来館者の滞留、進行、出入りといった行為の様態と眺めの方向を領域ごとに捉えることができる。

次に各領域の視覚的方向性に対応する眺めを対象としてその特徴を明らかにする。これをロビー空間全体で重ね合わせ、経路構成の観点から考察を加えることでまとめとする。

3. 領域構成と経路構成

3-1 領域区分と経路分析

領域区分：ロビー空間を経路の選択性という観点から捉えると6つの領域と1つの階段に区分することができる。エントランスロビー、食堂、1階ホール、地階ホールの4つの領域地下ホール・1階ホールとエントランスロビーをつなぐ結節領域1、食堂とエントラ

ンスロビーをつなぐ結節領域2、である。また結節領域ではロビー空間と展示室、ロビー空間同士をつなぐ結節点が集まっている。

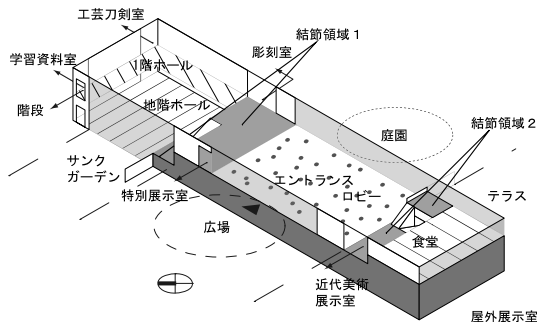


図2 ロビー空間と領域区分

経路分析：ロビー空間をめぐる経路は6つの領域と1つ階段の組み合わせによって構成されていく。また結節領域は結節点が集まっているため組み合わせの選択性を大きく作り出す部分と位置づけられる。経路構成の組み合わせを一筆書きの考え方に沿って整理すると図4のように4つの可能性にまとめることができる。はじめにエントランスロビーにおいて左右いずれかに進むかの大きな選択が用意されている。左右両側とも、エントランスロビーの端部は階段を含む結節領域となっており、ともに複数の選択肢が示されている。まず、左のホール側の結節領域には2つの領域(1階ホール、地階ホール)が接続するが両領域は北端の階段でも接続されることで、閉じたループを形成している。展示室への接続は、2つの結節領域と1階、地階ホールに集中しており、6つの領域と1つの階段による4通りの一筆書きの経路の中に位置づけることができる。以上によりロビー空間における経路構成はエントランスロビーと結節領域1を分

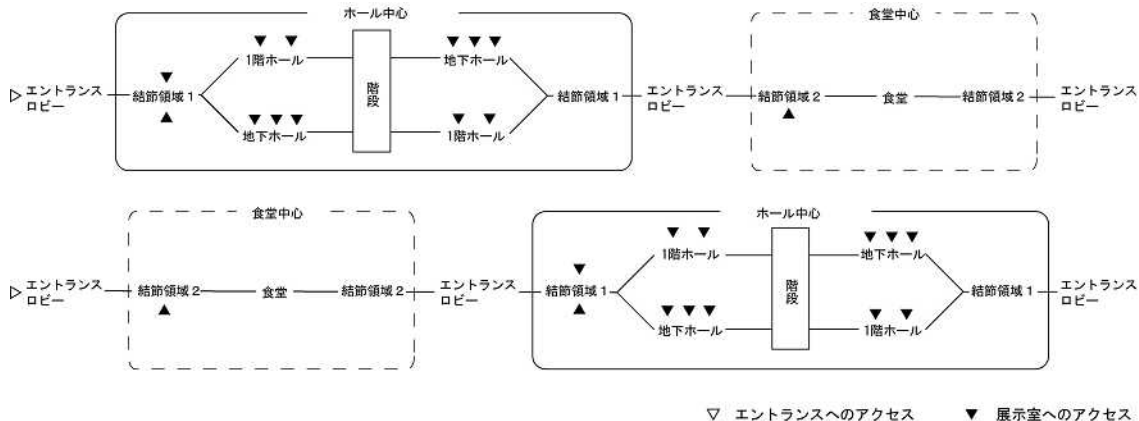


図4 領域間の経路の分析

岐とする4通りとなる。

3-2 各領域の行動的方向性と視覚的方向性

各領域について、領域の形状によって領域の行動的方向性を、外部空間への視覚的連続性とロビー空間内の他の領域に対する視覚的連続性によって領域の視覚的方向性を確認する(図5、図6)。

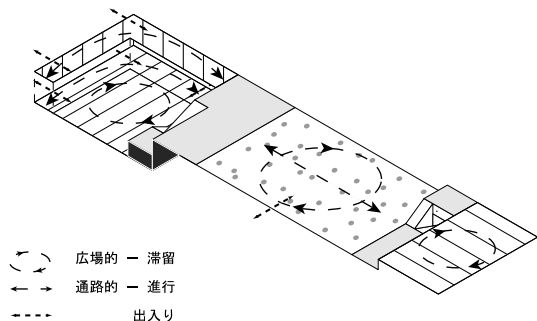


図5 行動的方向性

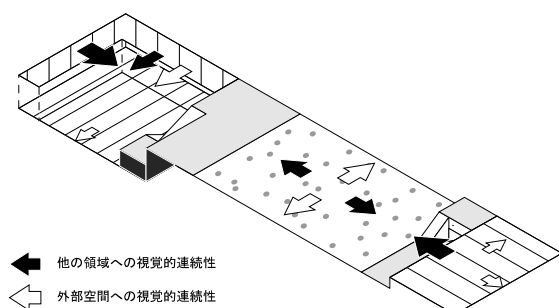


図6 領域の視覚的方向性

1階ホール：吹抜け部をこの領域は、L字状の細長い形状を示し、形状に沿った行動的方向性が明確な通路的性格を持った領域だといえる。L字状の入り隅部南側に他の領域が複数視覚的に連続し、西側には、他の領域と外部空間への視覚的連続性を示している。また、この領域にたいして、他の領域との接続が行動的方向性と一致するのに対して領域内に接続する展示空間はこれに直行する。

地階ホール：この領域全体は正方形に近い形状を示し全体としては卓越した行動的方向性をみることができない。しかし広場的な性格が強い上部が吹抜けの領域と、通路的な性格を持ったL字状の領域に大きくわけて捉えることができ、性格の違う領域が一体的な領域をつくりだしているといえる。また三面のほとんどを壁面で囲まれているため他の領域に対する視覚的連続性はないが、西側の1面は大開口面となっており外部空間への視覚的連続性をみることができる。また、この領域も

1階ホールと同様に、他の領域からの接続が行動的方向性と一致し、領域内に接続する展示空間はこれに直行している。

エントランスロビー：この領域の形状は南北方向に長辺を持つやや細長い矩形をとり、長辺方向への通路的な性格と広場的な性格を持つ領域だといえるが、この2つの性格を明確に領域で区別することはできず、同じ領域内に2つの性格が共存しているといえる。行動的方向性はロビー空間全体の方向性と一致する。南北端部に結節領域とそれぞれホール、食堂の空間が連続し、他の領域に対する視覚的連続性をみることができる。開口面は長辺部の両側に大きく配されているためロビー空間の方向性に対して直行の方向に外部空間への視覚的連続性を持っているといえる。またこの領域に対して接続する他の領域は行動的方向性と一致する方向にあり、中央のエントランスは直行する。

食堂：この領域の形状はロビー空間の方向性に対して直行方向に長辺をもつ矩形をとることによって直行方向への方向性をもっているが、食堂という滞留をうながす広場的な性格が強いため領域の形状からみた行動的方向性は明瞭ではない。またエントランスロビー側に領域が複数連続し、視覚的連続性を示している。開口面はL字型に配され、これによってそれぞれ直行、平行の方向に外部空間への視覚的連続性を持っている。

3-3 まとめ

各領域における2種の方向性を重ね合わせてみると、エントランスホールを中心に2つの広場が配されているが、視覚的方向性をみると地下ホールでは限定的な方向性を示し、逆に食堂では多様な方向性を示していることがわかる。また行動的方向性と視覚的方向性の一致はエントランスロビーでの進行の行動的方向性と他の領域に対する視覚的方向性との一致のみであり、2つホールでの進行の行動的方向性と視覚的方向性は、直行する関係を示している。また2つのホールから展示室への出入りの行動的方向性と視覚的方向性は一致している。

4. 眺めの分析

ここではロビー空間の様相が顕著にあらわれていると考えられる他の領域に対する視覚的連続性、外部空間への視覚的連続性対応す

る計 10 の眺めを対象とし分析を行っていく。

4-1 視対象と面の様相

まず 10 の眺めは、視対象が他の領域であるか、外部空間であるかによって大きく区分して捉えることができ、これは視覚的連続性の対象と一致する。次に、10 の眺めはロビー空間全体の矩形に対し直行または平行するものとなっており主に上下左右、つまり天井面、床面、左、右、正面の 5 面が建築的要素として眺めにあらわれてくる。(表 1)。

No.	天井	床	左	右	正面
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					

No. は図6に対応

表 1 面の様相

主な様相のあらわれ方はロビー空間の方向性に対して直行方向の眺め(No.1, No. 3, No.7, No.9)と平行方向の眺め(No.2, No.4, No.6, No.8, No.10)に大きな違いをみることができる。直行方向では、天井面の梁が開口面へと連続する様相をみることがでる。また左右に



写真 1 外部空間への眺め・直行方向

は同種の仕上げが施された壁面が開口面に連続する(写真 1)。

平行方向では、天井面の梁が左右へと伸び、その梁が奥へと並び直行方向とは異なった様相を示す。また左右の様相をみると、打込みタイルの壁面と開口面があらわれ断続する(写真 2)

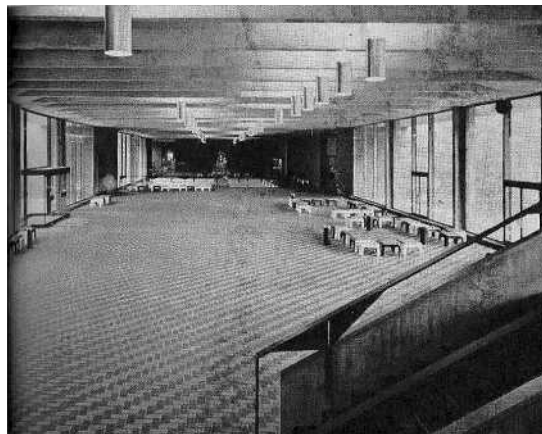


写真 2 他の領域への眺め・平行方向

4-2 眺めの分類

ロビー空間の 10 の眺めは、視対象と面の様相により 4 つのタイプに分類することができる。ロビー空間に対し平行に他の領域を望むタイプ、ロビー空間に対し平行に外部空間を望むタイプ、ロビー空間に対し直行に他の領域を望むタイプ、ロビー空間に対し直行に外部空間を望むタイプである。この分類を図 7 に示す。各領域での眺めでは、食堂においての眺めに多くの種類が含まれていることがわかる。また、地下ホールにおける眺めには直行方向の外部空間への眺めのみしかなく限定的な眺めとなっている。

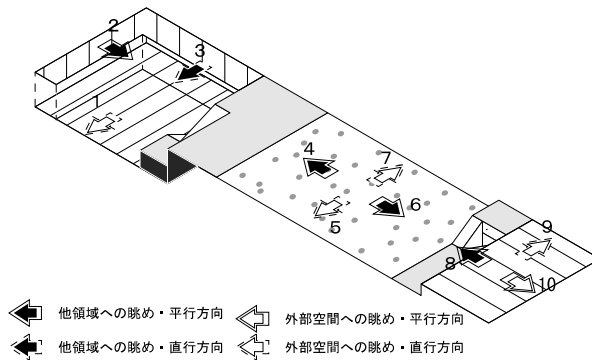


図 7 眺めの配置

5 まとめ

最後に経路構成における分岐に注目して、領域構成と眺めの特徴を明らかにするとともに、行動的方向性(進行、滞留、出入り)と眺めのタイプの関係について考察を加える。

まず、経路構成においてはエントランスロビーと結節領域 1 が分岐点となっていた。結節領域 1 では 1 階、地階ホールに対する選択が示されるが、両ホールは吹抜けを介して重ねられることで、地階の一部と 1 階の行動的方向性が一致し、外部への眺めのタイプも共通する相似的領域に対する選択となっている。一方、エントランスロビーでの分岐においては、食堂と両ホールが対照的な選択として示されることになる。それぞれには、広場的な領域が含まれるが、視覚的方向性、眺めのタイプともにホール側が限定的であるのに対し、食堂側は多様である。

次に行動的方向性と眺めのタイプの関係を見てみると、ロビー空間に直行する外部への眺めは、すべて出入り、滞留といった行為とともに用意されている。一方、進行の行動的方向性と視覚的連続性が唯一、一致をみせるエントランスロビーの眺めはロビー空間に平行する他の領域への眺めとなっており、行為

と眺めのタイプの関係に明快な対照があるといえる。

これまで明らかとなった経路選択の可能性と同時に各領域の行動的、視覚的方向性、眺めのパターンを模式的に表現しまとめとする。

ⁱ 後期作品を対象に形態分析を行ったものとして、飯田 利彦・川崎 幸彦、「建築の形態分析：前川國男の後期主要作品の作品形式について・その1~4」、福岡大学工学集報、70,71、2003年。埼玉県立博物館の設計過程を、現存する図面にもとづき分析したものとして神部 聡・田路貴浩、「埼玉県立博物館の設計過程」、2006年

ⁱⁱ 前川國男建築設計事務所編『コスモスと方法』、199項
 写真1 生誕100年・前川國男建築展実行委員会監修、『建築家 前川國男の仕事』、美術出版社、2006年
 写真2 『建築文化』Vol.27 No.303 1972年

(平成20年12月26日受理)

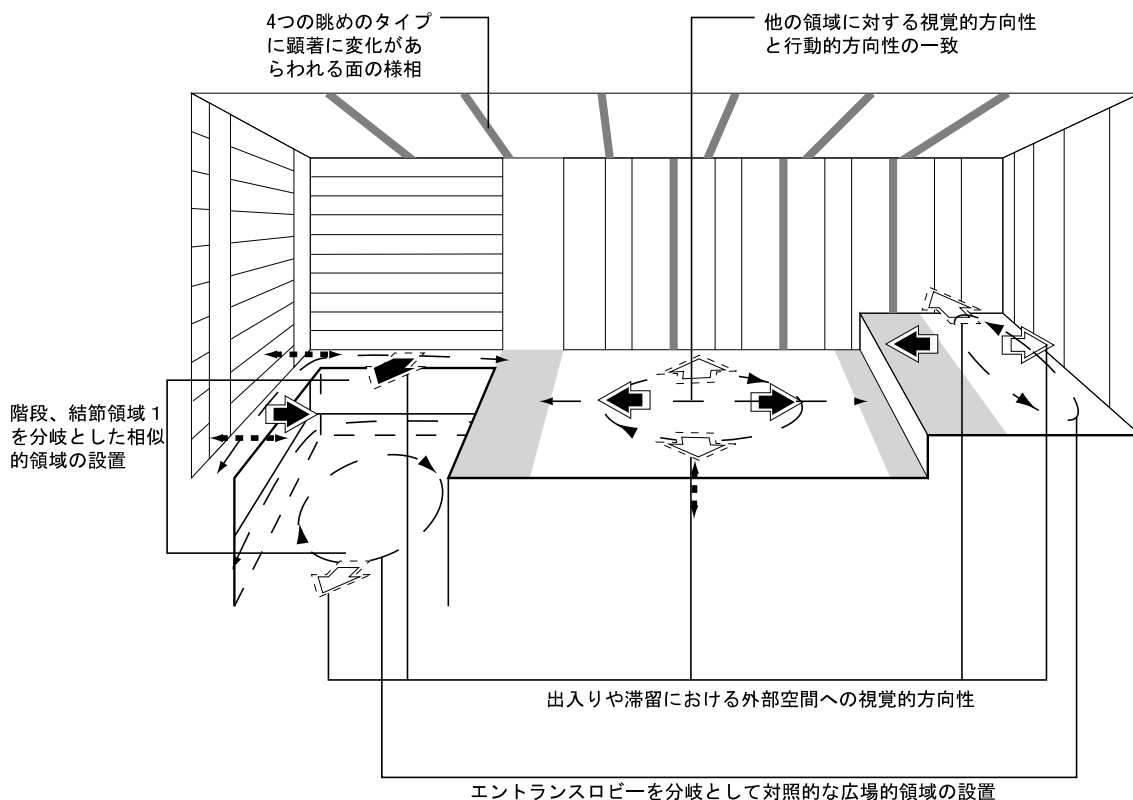


図8 シークエンス構成の特徴